

日英放送通訳者の英語に見られる音声学的特徴について

Prosodic Aspects of Broadcast Interpreters' English

三 島 篤 志

Atsushi Mishima

1. はじめに

通訳プロセスは大きく分けると、1) 起点言語の理解及び情報の整理、2) 目標言語への変換、3) 訳文の音声表出の3つに分けられる。これまで通訳を扱った研究では主に1)と2)のメカニズムの解明に焦点が置かれてきた。本稿の狙いは、通訳の最終段階に当たる訳文の音声表出、具体的には、日本人通訳者が日英通訳したときの英語の発音の実態を明らかにすることである。翻訳と違い音声を媒体とする通訳では、いくら正確で適切な訳ができていても、音声表出に不備があれば聞き手に不必要な負担を強いることになり、極端な場合、聞き手の注意が訳出の内容ではなく音声そのものに向けられ、理解を阻害することにもなりかねない。

日本人通訳者の音声表出で特に問題となるのは非母国語である英語に向かって通訳する場合である。通訳者は高度な英語運用能力を持っているが、そのすべてがネイティブスピーカーに匹敵する発音ができるとは限らない。実際大手通訳エージェントの1つであるサイマルインターナショナルに登録されているA及びBランクの通訳者のうち、中学3年までの間に3年間以上英語圏で生活したいわゆる帰国子女の占める割合はおよそ3割弱で、残り7割は英語を第二言語として学んだ人たちだという(小松 2005)。思春期を過ぎてから第二言語の習得を始めた人は母語話者並みの発音能力を習得するのが困難であることを考え合わせると(Oyama 1976, Patkowski 1990)¹⁾、ネイティブ並みの発音ができる日本人通訳者は必ずしも多くないと予想される。日常生活レベルで発音が問題となることのない通訳者も、通訳の作業中は認知資源の多くを高位の処理(言語理解、変換)に奪われ、低位の作業(発音)に十分回すことができず、訳出時の発音が乱れることがある。発音の乱れはデリバリーにも影響を与え、正確な訳出をしているにも関わらず聞き手にメッセージがうまく伝わらなくなる事態も起こりうる。そういう意味では通訳者の英語の発音を母子音などの単音レベルだけでなく、リズム、イントネーションにいたるプロソディーレベルまで包括的に調べその実態を明らかにすることは意味があることだと思われる。本稿はまずその第一歩として、音声多重TVニュースに見られる日本人放送通訳者の英語の特徴を、イントネーションを中心に分析し明らかにしていきたい。

2. 音声多重 TV ニュース

テレビの音声多重放送の歴史は古く、NHK が1969年に初めて実験放送を行った後、1978年にはNHK 他、民放各局も実用放送を開始している²⁾。音声多重放送では左右のチャンネルに異なる情報が流されるが、ニュース番組に限って言えば、主音声と副音声にそれぞれ別の言語で同じニュースが流されることになる³⁾。この放送形式は2カ国語放送とも呼ばれ、ニュース以外にもドキュメンタリーやスポーツの実況のほか、映画、音楽などのエンターテインメント系の番組でもよく見られる。日本国内の音声多重英語 TV ニュースは大きくわけて2種類ある。1つは、米 ABC、CNN Headline News、英 BBC 6、10 など英米で放送されているニュース番組を日本語に通訳し放送しているもの、もう一つは日本国内で放送されている TV ニュースを英語に通訳し放送しているものだ。ここでは便宜的に前者を英日多重ニュース、後者を日英多重ニュースと呼ぶことにする。

英日多重ニュースについては上記番組以外にも米 NBC ナイトリーニュース、米 CBS イブニングニュース、米 CNNj、英 BBC World、米 CNBC の経済ニュースなど各種番組が放送されているが、日英多重ニュースはこれに比べると数はかなり少ない。かつては NHK 以外の複数の民放キー局が放送していたが⁴⁾、現在は、NHK が毎日午後7時から7時30分まで放送する「ニュース7」、毎週月曜から金曜午後9時から9時45分まで放送する「ニュースウォッチ9」、そして民放ではTBS 系列で毎週月曜から土曜午後5時50分～6時16分まで放送される「JNN イブニングニュース」のみである。本稿で分析対象とするのは後者の日英多重ニュースである。

3. 日英多重ニュースの通訳形式

音声多重ニュースの通訳については、すべて同時通訳で行われているとの誤解もよく見られるが、実際は TV 局の方針や番組の内容などを考慮したうえでさまざまな通訳形式が取られている。英日多重ニュースの場合、本放送の前に通訳者がニュースを2、3回以上見て通訳原稿を作成し、オンエアではオリジナル音声に合わせてながらそれを読む「時差通訳」、本放送の前に通訳者がオリジナルニュースを2、3回見て必要最小限のメモを取り、オンエアでは同時通訳に近い形で訳出していく「セミ同時通訳」、そして、ぶっつけ本番で通訳する純粋な「同時通訳」の3つのパターンがある。これに対し、日英多重ニュースの通訳は基本的に同時通訳に対応している⁵⁾。もちろん、事前に関連情報を調べたり必要な用語を英語で確認したりするなどの準備作業はしているが、オンエア時に完成原稿を読みあげることは一部のニュースを除いてはない。放送が始まってから新しいニュースが追加され、日本語原稿も出来上がっている場合は、それを見ながら同時通訳することもある。日英多重ニュースは英日の場合と違いネイティブリーダーが事前に用意された完成原稿を読んでいる場合もあるので、分析する場合はこれと区別して考える必要がある。

4. 分析の対象及び方法

分析の対象としたのは、NHKのニュース番組、「ニュース7」と「ニュースウォッチ9」で、2007年6月1日から30日に放送された両番組の中から、日本人通訳者が担当したニュースを無作為に6本選び、これを書き起こした。トランスクリプトには、ポーズの位置、イントネーションなどの音声表記を加えていった。また、参考のためにネイティブリーダーが原稿を読み上げているニュースについても2本書き起こした。イントネーションの表記はO'Connor and Arnold (1973) など広く使われている音調強勢記号 (Tonetic Stress Marks) に基づき行ったが、渡辺 (1994) も一部参考にした。下記にその表記法を簡単に紹介してある。今回は原則、頭部 (head) で最初に文アクセントを受けた音節 (onset) と音調核 (nucleus) の表記のみにとどめている。核音調を受ける音節には下線部が引いてある。分析対象となった日本人通訳者は8人で全員が女性、ネイティブリーダーは男性1人、女性1人である。音声分析に際し必要に応じ音声分析ソフト (杉スピーチアナライザー) も使用した。

音調群の境界	
ポーズを伴う音調群の境界	

頭部 (Head)	
低頭部 (Low head) 低い平坦なピッチの連続	chair
下降頭部 (Falling head) 最初の音節からピッチが徐々に下降	\chair
高頭部 (High head) 高いピッチの連続	chair
上昇頭部 (Rising head) 最初の低いピッチから徐々に上昇	/chair
平坦頭部 ⁶⁾ (Level head) 中程度の平坦なピッチの連続	°chair

核音調 (Tonicity)	
低下降調 (Low fall) 声域の中程から底部までの下降	\chair
高下降調 (High fall) 声域の高い部分から底部までの下降	\chair
部分下降調 (Partial fall) 声域の中程まで下降	^chair
上昇下降調 (Rise fall) 声域の中程から上昇し、その後下降	^chair
低上昇調 (Low rise) 声域の底部から中程に上昇	/chair
高上昇調 (High rise) 声域の中程から高い部分に上昇	'chair
平坦調 (Mid level) 声域の中程を平坦に	>chair
複合調 (compound) 高下降部と低上昇部が分離	\come...to_morrow

5. 分析結果

5. 1. 発話のスピードとテンポ

今回分析した6本のニュースを調べたところ、平均速度は1分間に147語であることが分かった。そのうち一番速度が遅いものは128語、一番速いもので170語だった。渡辺(1980)によると、英語を母国語としない人を対象にしたBBCの海外向けラジオニュースの1分間の平均速度は140語、BBCの国内放送は177語、アメリカの国内放送(CBS, NBC, ABC)で平均192語、ラジオ・オーストラリアの海外向けニュースは毎分155語程度だと言ひ、今回比較のために調べたネイティブリーダーが読み上げたニュースの平均速度167語⁷⁾と比較しても、日本人通訳者の発話速度は比較的ゆっくりとしたものと言える。もちろん日英多重ニュースが日本人を含む非英語母語話者も念頭に置き作られていることを考えると、海外向けラジオ英語放送と同様の速度で話されていること自体特に問題はない。また、ネイティブリーダーが単純に原稿を読み上げる場合に比べ、通訳者の話すスピードが遅くなるのは当然とも言える。

発話全体を通しての緩急は予想通り、訳出の難易度によって大きく左右されていた。TVニュースの通訳は画面の動きに合わせて訳出することが求められ、多くの通訳者はこれに従って訳出していたが、訳出が大幅に遅れたときは早口になりがちで、特に画面上で話者が切り替わる場面ではその傾向が強かった。

5. 2. ポーズ

ネイティブリーダーと比べ日本人通訳者の発話では、句や節などの文法的切れ目以外でポーズを挿入している例が観察された。これは、通訳者が画面を見ながら完全な原稿を読んでいるのではなく音声を聞きながら通訳している証拠とも言えるが、訳出が困難なときは、極端な場合、単語ごとにポーズが置かれていたときもあった。

- * So they don't like to have the framework led by G 8 || countries. ||
- * …will take a sincere measure | towards this °issue of the °pension || records | …
- * …also, there is a >serious || °water shortage.||
- * And an other || °focus || °is || °made || °on || whether they can….

表1. 発話内におけるポーズの頻度 (%)

	文法的切切れ目	非文法的切切れ目
通訳者	82	18
ネイティブリーダー	95	5

表1. は両者の発話内で起こったポーズの頻度を示したものである。ポーズの存在自体はリスニングの作業を促進させることがすでに明らかにされているが、重要なのはその長さではなく、文法的（または意味的）切れ目に置かれているかどうかである（cf. 河野 2001）。それ以外の箇所でのポーズが増えるとリスニング作業の妨げになることも考えられる。

次にポーズが現れる位置だが、文頭で現れることが多かった。

- * Now, || if >we || liken this agreement to perhaps a baseball game…
- * Therefore the || rain front || will >move || northwards || and towards Honshu…

一般に発話の冒頭では思考をまとめるためポーズが現れる傾向が強いが、日本語は文末に述部が来るので、ある程度文を聞いてからでないと訳文の構造を決められないなどの理由も考えられる。また、ポーズは全体としては名詞や動詞などの内容語の後に置かれることが多かった。内容語の後は句や節など文法的切れ目があることが多いのでこれはある程度予想されたが、前置詞や接続詞など機能語の後に起こることも少なくなかった。

- * Europe sees this summit || hosted by >Germany || >as || an oppor|tunity to reach some kind of agreement |…
- * …China and India || >had a || pre \liminary meeting in Ber >lin, || before the \summit was held |…

意味が限定されれば機械的に処理できる機能語と違い、選択肢の多い内容語の前でポーズを置くのは通訳というオンライン作業上必要なのかもしれない。また、長い単語が続く前にポーズを置く場合もあった。

- * … whether they can in corporate || \newly-industrialized >coutries and de veloping countries |…

5. 3. イントネーション

ニュース英語の音声的特徴については前掲の渡辺（1980）が詳しいが、日英多重ニュースにおけるネイティブリーダーの音声的特色、特に、そのイントネーションの特徴については山根（1983）の研究がある。この研究は主に民放のニュース番組（JNN ニュース）を対象にしたものだったが、以下、この山根の研究、そして、今回集めたNHKのネイティブリーダーのデータとも比較しながら、日本人通訳者の訳出文に見られたイントネーションの特徴を見てみる。

5. 3. 1. 音調群の数

今回のデータのうち、日本人通訳者の発話に見られた音調群は全部で645個だった。このうち文末の音調群の数は152個、非文末の音調群の数は493個となった。一方、ネイティブリーダーの音調群の数は文末で43個、非文末で89個だった。通訳者の発話は原稿を読み上げているネイティブリーダーの場合と異なりポーズが多かったため、音調単位の長さが短くなる傾向があり（通訳者：約3.8語、ネイティブリーダー約6.2語）音調群の数も増えていた。以下、文末、非文末の音調群について核音調の種類を見ていく。

5. 3. 2. 文末音調群

表2-1～2-3は山根（1983）と、今回分析した日本人通訳者とネイティブリーダーの文末音調群に見られた核音調の数と種類を示したものである。

表2-1. 山根（1983）で見られた文末核音調の種類と頻度

	下降調			上昇調			平坦	複合
	低下降	高下降	上昇下降	低上昇	高上昇	下降上昇		
頻度	9	61	2	1	5	2	0	5
%	10.5	71.7	2.4	1.2	5.9	2.4	0	5.9

表2-2. 日本人通訳者の文末核音調の種類と頻度

	下降調				上昇調			平坦	複合
	低下降	高下降	部分下降	上昇下降	低上昇	高上昇	下降上昇		
頻度	94	41	0	0	1	8	4	3	1
%	61.8	26.9	0	0	0.7	5.3	2.6	2.0	0.7

表2-3. ネイティブリーダーの文末核音調の種類と頻度

	下降調				上昇調			平坦	複合
	低下降	高下降	部分下降	上昇下降	低上昇	高上昇	下降上昇		
頻度	15	28	0	0	0	0	0	0	0
%	35	65	0	0	0	0	0	0	0

山根は部分下降調という区分を設けていないが、3つのデータを見ると文末に下降調を使うのはネイティブリーダーと日本人通訳者に共通して見られる特徴であることが分かる。文末に下降調を使うのはニュースに限ったことではなく、渡辺（1980）も英米の小説朗読のイントネーションを調べたところ80%が下降調だったと言い、発話の「終了」や「完結」などを示す下降調が文末で一番多用されているのは当然と言える。ただ一方で同じ下降調でも、ネイティブリーダーに

比べ日本人通訳者は、文末を最も明示的に示す高下降調よりも低下降調を多用しているのも見てとれる。高下降調は内容を断定的に明確に伝えるのに適しており、特にニュースの文末音調としては非常に良く見られるが、常に後続部の訳出に注意を奪われ、発声にまで十分に気を配れない通訳者はどうしても使用ピッチ域 (pitch range) が狭くなり、声を思い切って落とすことができないのかもしれない。

(低下降調の例)

- * So, some analysts ↓say | it will be ↓difficult | for the °government to recover its approval rates ↓soon. || …
- * …it's a >bout || Europe and the U.S. ↘vying for ↓leadership | on this ↓issue. ||

(高下降調の例)

- * …al° though they are in the same ^bed, | so they may face more °obstacles. ||
- * …he ↘took up these °issues | at the °outset | calling for sup ↘port from other G 8 °nations. ||

一方、上昇調もネイティブリーダー、日本人通訳者を問わず下降調に比べると断然数が少ないものの使われてはいる。上昇調は後述のように発話が「未完了」な感じを与えるため文末によく使われるが、ほとんどはキャスターと中継先の記者とのかけ合いの箇所、キャスターが発した質問文の訳出部分だった。

(高上昇調の例)

- * Can you tell me what the key issues ^were? ||
- * …but was he able to get |garner under ↓standing by the nations? ||

一方で普通の陳述文でも文末で上昇調が使われていたケースもあった。

- * I am >now || on the border of >Israel | and the northern |tip of Gaza ↓strip. || Behind ↓me | you ^see | the °city of ↓Gaza || and now we no |longer hear the gun ^shots. ||…

これは記者の現地からの中継部分だが、全体的に平坦調、上昇調が多い。体裁上は文末にはなっ

ているものの、通訳者の意識としては現地の様子を次々に列挙している感じではないかと思われる。具体例を列挙する際に上昇調が使われることは珍しいことではない。

5. 3. 3. 非文末音調群

文末とは違い後にまだ発話が続いていく非文末では、日本人通訳者、ネイティブリーダーを問わず核音調の種類も増えていることが分かった。

表3-1. 山根(1983)で見られた文末核音調の種類と頻度

	下降調			上昇調			平坦	複合
	低下降	高下降	上昇下降	低上昇	高上昇	下降上昇		
頻度	31	18	4	72	55	19	17	2
%	14.2	8.2	1.8	33.0	25.2	8.7	7.9	1.0

表3-2. 日本人通訳者の文末核音調の種類と頻度

	下降調				上昇調			平坦	複合
	低下降	高下降	部分下降	上昇下降	低上昇	高上昇	下降上昇		
頻度	89	94	59	3	69	32	62	79	6
%	18.1	19.1	11.9	0.6	14.0	6.5	12.6	16.0	1.2

表3-3. ネイティブリーダーの文末核音調の種類と頻度

	下降調				上昇調			平坦	複合
	低下降	高下降	部分下降	上昇下降	低上昇	高上昇	下降上昇		
頻度	11	8	17	0	1	22	21	8	1
%	12.4	9.0	19.1	0	1.1	24.7	23.6	9	1.1

非文末の音調核では、発話が「未完」「継続」であることを示す上昇調系統の音調がよく使われ、下降上昇調と並んでイギリス英語では高上昇調と低上昇調が、アメリカ英語では高上昇調と部分下降調が多く用いられるという(渡辺, 1994)。これらの非文末音調は日本人通訳者の発話にも比較的よく現れている。ちなみに部分下降調については、渡辺によると、話し手の声域の高いところから中程までの下降ということだが、今回のデータでは声域の中程より少し上の辺りから、底部の手前で下降が止まるような例もありそれらを含めて部分下降として扱っている。

(低上昇調)

- * As we just heard, || the confrontation over global warming || is not just about targets,...
- * In the |leader's meeting, | the |world e conomy was discussed. ||

(高上昇調)

- * And after lunch, | there will be further discussions | regarding this matter | ...
- * ...and as a re sult | North Korea had been \forced to \give up their over seas account | and...

(上昇下降調)

- * ...but in the end, | President \Bush made a compromise | for \better relationship with Europe.||
- * As was before, | What \North Korea is de manding for | is to be |able to engage freely |...

(部分下降調)

- * ...°piracy of CDs and DV Ds | are \on the rise in our daily lives |...
- * ...the question is | °how does Ja pan || regard this a greement? ||

3つのデータを比べてみると、山根と今回のネイティブリーダーでは、上記の4種類の音調が占める割合がそれぞれ66.9%と68.5%と7割近くに達していたのに対し、通訳者では45%に留まっていた。これは言い換えれば、非文末にも関わらず下降調がかなり多用されていることを意味する。

非文末での下降調はもちろん選択肢としては可能であり、ネイティブリーダーの発話にも見られるが、日本人通訳者の場合は特に文末で多用される高下降調が多く、これはやや不自然な感が否めない。そこで各通訳者の音調群の数を調べ直してみると、他の通訳者に比べある通訳者の発話で非文末の高下降調が特に多いことが分かった。この通訳者のデータを除いてデータをまとめ直したのが、表3-4である⁸⁾。

表3-4. 日本人通訳者の文末核音調の種類と頻度 (2)

	下降調				上昇調			平坦	複合
	低下降	高下降	部分下降	上昇下降	低上昇	高上昇	下降上昇		
頻度	68	44	48	1	53	23	41	56	4
%	20.1	13.0	14.2	0.3	15.7	6.8	12.1	16.6	1.2

高下降調の出現頻度数は確かに減ったが、それでも依然として日本人通訳者の方がネイティブリーダーと比べ高下降調が多い傾向は変わらず、全体としても下降調が多い。ポーズの前ではピッチが下がりやすいことも考えられるため、下降調の直後にポーズが現れている頻度を調べてみたが、32.1%にとどまりそれほど多いとは言えない。いずれにしろ、これは通訳者が無意識のうちに分かりやすさを優先して文法的切れ目を強調して発音している可能性も考えられる。

日本人通訳者の発話にはまた平坦調もかなり見られた。大きくは上昇調に分類される平坦調も発話がまだ継続することを示すものであり、非文末で現れること自体不自然とは言えないが、日本人通訳者の場合は、ネイティブリーダーに比べ多用しているようである。平坦調が特に見られたのが、明らかに通訳者が次の発話のプランニングに注意を奪われている場面で、比較的短い音調群でよく見られた。高位の言語変換作業に認知的資源を割かれ、イントネーションにまで十分注意を払うことができなかつたと考えられる。

(平坦調の例)

- * The \stand-off between Europe and the US over global \warming | has °much to do with their respective am \bitions | to >shape || the de \bate || \over || global \warming.||
- * There are >calls | to extend the parliamentary \sessions. ||

さて、最後にピッチ幅について簡単に述べる。日本人が英語を話すときは一般に平板になりやすいと言われ、ネイティブスピーカーよりも使用ピッチ域 (pitch range) が狭いことが指摘されている (山根 1999)。今回は通訳者、および、ネイティブリーダーの発話がすべて違うため比較はできないが、日本人通訳者の場合、ピッチ幅が極端に狭い者もいれば (図1)、比較的広いものもいた (図2)。ただ、全体の印象としては日本人通訳者の英語の方がピッチ域が狭いイメージを受けた。

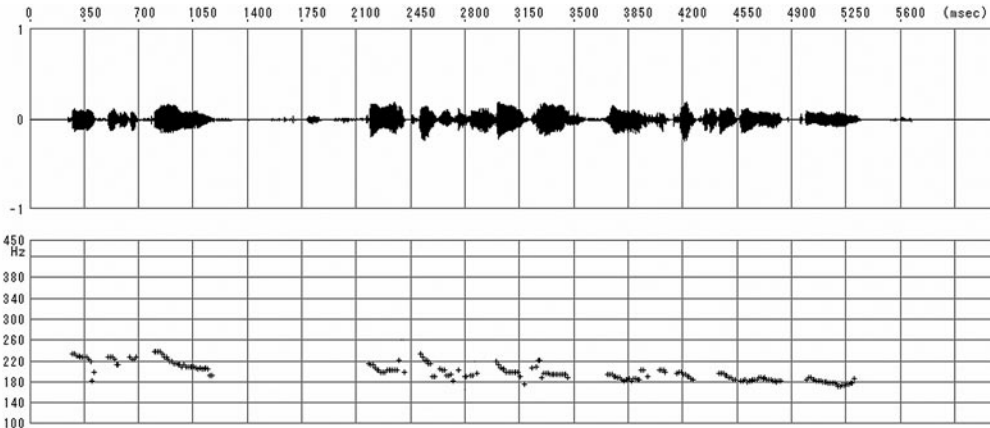


図 1. **And for Japan, the important issue is the abduction by North Korea.** の波形とピッチ曲線

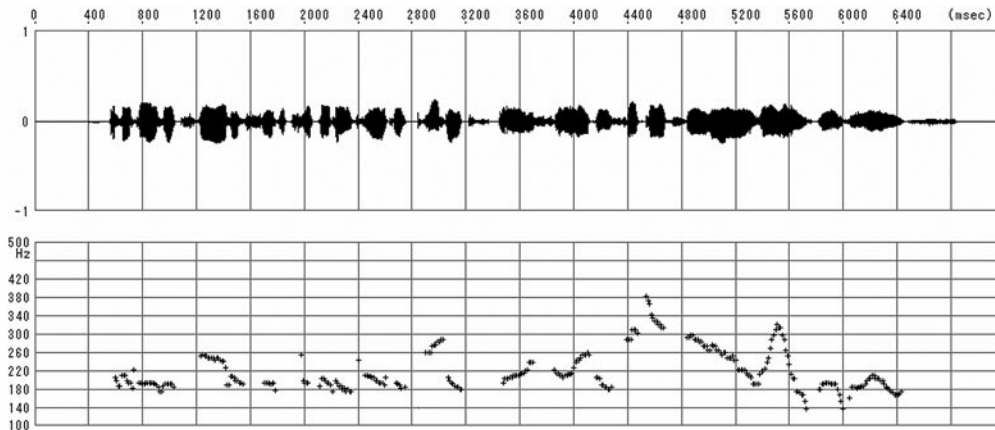


図 2. **The global trade of such copied and pirated products amounts to more than 70 trillion yen in a year.** の音声波形とピッチ曲線

Yabuuchi & Sato (2001) によると、日本人英語学習者が音読した英語を英語母語話者に聞かせ、英語としての自然さを判定させた結果、使用ピッチ域が大きいほどより英語らしいと認定されたという。「英語らしさ」が英語の「聞きやすさ」に直接つながるかどうかは微妙な問題だが、英米のニュースキャスターやリポーターがどのようなピッチ域を使用し、それが日本人通訳者との程度違うかは今後さらに詳しく検討する必要がある。

5. 4. 分節音レベルの特徴

日本人の英語の発音に見られる典型的な特徴や誤りのパターンについてはすでにこれまでの研究で明らかになっている (杉藤 1996, Avery and Ehrlich 1992 など)。今回のデータでは、明らか

な言い誤りを除いて、分節音レベルで各通訳者間に共通して見られる不自然な発音はなかった。単音レベルでの日本人英語の特徴として子音の発音が弱いことがよく指摘されているが⁹⁾、今回のデータでは、逆に子音を意識的に強く発音している通訳者も見られた。しかし、語末の破裂音を内破させず気息化させたためかえてリズムが乱れたり、後続する機能語をうまく弱化できなくなるなどのケースも見られた。

- * He has clearly announced that… [ə'naunst^ɪ ðæt]
- * …these countries have different dreams. ['dɪfərənt^ɪ dri:mz]
- * Angela Merkel also actively pressed him. [prest^ɪ hm]

ただ、全体としては語末の [t] や [d] などの破裂音の内破は自然に行われていた。

- * …is expected to be one of the major agenda. [ɪks'pektɪd^ɪ tə]
- * …allowing it to take control… [ɪt^ɪ tə]
- * North Korea had been forced… [həd^ɪ bɪn]

また、[t] の音が強勢を受ける母音と受けない母音に挟まれたときに生じる有声化、および、弾音化は特にみられなかった。

一方、ネイティブスピーカーの発話では自然に見られるリエゾンについては、発話スピードとも関係はするが、個人差が見られた。

- * …hold an Upper House election. ['houldən]
- * …may engage themselves on the nerve war. [ðəm'selvzən]
- * This will be held in Japan ['heldɪn]
- * A target of reducing GHG ['tɑ:rgɪtəv]

また、フォーマルなスピーチレベルであるニュース英語では短縮形は用いないのが普通との指摘もあるが (山根 1983)、通訳者の発話の中には散見された。通訳者がどの程度までスピーチレベルに配慮して話しているかについては今後さらに検討が必要だろう。

- * They will have to look into the possibility… [ðeɪl]
- * …Soichi Tsukamoto, who is covering the issue. [hu:z]
- * As we have seen in the winter, [wɪv]

6. 終わりに

本稿では、日英通訳の最終段階に当たる音声表出に着目し、その音声学的特徴を放送通訳者の訳出を例に議論してきた。今回の分析で分かったことをまとめると以下のようになる。

- 1) 通訳者の訳出速度はおよそ1分間に147語と、外国人向けの英語ニュースのスピードに近い。
- 2) ポーズは文頭で起こることが多く、非文末的切れ目で生じることもあった。
- 3) 文末では下降核音調を使うことが多いが、ネイティブリーダーと違い低下降調を使う傾向があった。
- 4) 非文末では文末に比べ核音調の種類は増えたが、ネイティブリーダーと違い下降調を使う傾向があった。
- 5) 非文末の平坦調もネイティブリーダーよりも多用していた。
- 6) 分節音レベルでは、日本人特有に見られる発音の誤りはなかった。

今回分析の対象とした通訳者の人数やデータの数はまだ十分とは言えず、今後も放送を含む様々な分野での日英通訳の音声データを収集し、日本人通訳者の英語発音の全体像を明らかにしていく必要があるだろう。

通訳者は通常、専門家、または、少なくとも話題に利益、興味、関心を持つ人たちの前で通訳を行う。しかし、放送通訳の場合、聞き手は不特定多数の視聴者で必ずしも注意してニュースを聞いている人ばかりではない。それゆえ聞き手の通訳者の発話に対する許容度も低くなると予想される。原稿を読み上げているネイティブリーダーとは違い、通訳者の英語はスピードもゆっくりめで比較的聞きやすい一方で、言い過ちや言いよどみのために文法的、意味的単位と合致するはずの音調群が途中で断ち切られるケースも散見された。もちろん、通訳者にプロのアナウンサー並みのデリバリーを期待するのは厳し過ぎるが、ニュースの受け手である視聴者がどのような英語を聞きやすいとみなしているのかはさらに詳しく調べていく必要があると思われる。

通訳の良し悪しを決める重要な要素が訳の正確さ、適切さであるのは間違いない。また、現実問題として通訳という高度に認知的な作業をしている時に発音にどれだけの余力を割くことができるのかという難しい問題もある。ただそれでも音声を媒介としたコミュニケーションである通訳において発音の重要性を忘れるわけにはいかない。発音は英語運用能力の中でも特に最後まで習得が難しいとされ、本稿で主に取り上げたイントネーションはいわゆる「外国語訛り」としても残りやすいという(河野2007)。にもかかわらず通訳訓練におけるこの側面の練習は個人の裁量にまかされているのが現状で通訳学校でも体系的に教えていない。もちろん、すべての通訳者が

ネイティブスピーカーのような発音を目指す必要などなく、実際それは不可能であろう。重要なのはどのような英語の発音が「通じやすい」のかを調べ、モデルを確立し、そのような発音を通訳者は日頃から目指すことではないだろうか。この方面の研究は近年英語教育の分野で盛んになってきている (Jenkins 2000) ⁹⁾。たとえば、河野 (2007) で紹介されている Suenobu, Yamane, Kanzaki (1995) の研究によると、単語のアクセントの位置を間違えるなどプロソディー面で問題のある発音は通じにくい、日本人英語の大きな特徴の一つである子音の後に母音を挿入した発音は比較的アメリカ人には理解されやすかったという。ネイティブらしくない発音は必ずしも通じない発音とは限らないのである。

【注】

- 1) Neufeld (1978)、Bongaerets (1999)、Moyer (1999) など思春期以降でも母語話者並みの発音を習得することが可能であることを示唆する研究もある。発音の習得は個人差が大きいが、習得に適した「敏感期」のような期間があることは多くの研究者が指摘している。
- 2) 20世紀放送史 (2001)。
- 3) 英米のニュース番組は、主音声では通訳者の日本語訳を、副音声ではオリジナル英語音声放送され、日本国内のニュース番組の場合は、これとは逆に主音声で日本語のオリジナル音声が、副音声でその英語訳が放送されている。
- 4) Wikipedia 日本語版によると、NHK の「NHK ニュース 9 (1995年4月～2000年3月の間のみ)」と「NHK ニュース10」とNHK 衛星第1放送の「BS ニュース経済最前線 (2005年12月まで)」、日本テレビのお昼以降のニュース番組、TBS テレビの「JNN ニュースコープ」と「JNN ニュースの森 (平日全国ニュース枠のみ)」、フジテレビの20時55分の「FNN ニュース・明日の天気」(現在のFNN レインボー発)、2002年の「FIFA ワールドカップ」の期間中のみ「NHK ニュース (正午)」、フジテレビの「ニュース JAPAN」などがかつて日英多重放送が行われていたという。
- 5) ただ、ニュースによってはどこまでが純粋な同時通訳であるか判断するのが難しいときもある。
- 6) O'Connor & Arnold (1973) や Wells (2006) は典型的な頭部の型を示し、それらがどのような核音調と共起するのかを説明しているが、これらは主に外国語学習者へのモデルを意識したのもで、現実にはこれ以外のパターンも考えられる。今回のデータでも頭部で強勢を持つ音節がほぼ同じ高さで現れるケースが多く見られ、それらを今回は平坦頭部として分類した。
- 7) これは山根 (1983) が調べた日英音声多重ニュースの平均161語ともかなり似ている。
- 8) 文末の音調核のデータも同様にこの通訳者を排除し集計し直したが、全体的な傾向は大きく変わらなかった。

	下降調				上昇調			平坦	複合
	低下降	高下降	部分下降	上昇下降	低上昇	高上昇	下降上昇		
頻度	71	21	0	0	1	7	3	3	1
%	66.4	19.7	0	0	0.9	6.5	2.8	2.8	0.9

- 9) 野中(2005)は、亡くなった落語家の桂枝雀がニューヨークで行った英語落語を聞いていたアメリカ人が、枝雀の英語は決して上手とは言えないが、アメリカ人にはわかりやすかった、彼は子音をとてもはっきり発音していたからだと話したエピソードを紹介している。
- 10) ただ誰にとって「通じやすい英語」なのかは大きな問題で、ネイティブスピーカーにとって通じやすい英語と日本人を含むノンネイティブスピーカーにとって通じやすい英語が同じとは限らない。ネイティブスピーカーにとっては単音の発音よりもリズムやイントネーションが重要であるのに対し、逆にノンネイティブスピーカーには前者を明確に発音する方が大切だとの指摘もある (Jenkins 2000)。

【参考文献】

- 河野守夫 (2001) 『音声言語の認識と生成のメカニズム：ことばの時間制御機構とその役割』 東京：金星堂
- 河野守夫 (編) (2007) 『ことばと認知のしくみ』 東京：三省堂
- 小松達也 (2005) 『通訳の技術』 東京：研究社
- 日本放送協会 (編) (2001) 『20世紀放送史』 東京：日本放送出版協会
- 杉藤美代子 (1996) 『日本人の英語』 大阪：和泉書院
- 野中泉 (2005) 『英語舌のつくり方』 東京：研究社
- 山根繁 (1983) 音声多重放送における英語ニュース—その音声的特色 *Tezukayama College Helicon*. 8 : 39-54
- 山根繁 (1999) 英米人との比較による日本人英語のプロソディー 『ことばとコミュニケーション』 第3号 pp. 19-28
- 渡辺和幸 (1980) 『現代英語のイントネーション』 東京：研究社
- 渡辺和幸 (1994) 『英語イントネーション論』 東京：研究社
- Avery, P., S. Ehrlich. (1992) *Teaching American English pronunciation*. Oxford: Oxford University Press.
- Bongaerets, T. (1999) Ultimate attainment in L2 pronunciation: The case of very advanced late L2 learners. In Birdsong, D (ed.) *Second language acquisition and the critical period hypothesis*. Mahwah: Lawrence Erlbaum.
- Jenkins, J. (2000) *The phonology of English as an international language*. Oxford: Oxford University Press.
- Moyer, A. (1999) Ultimate attainment in L2 phonology. *Studies in second language acquisition* 21: 251-286
- Neufeld, G. G. (1978) On the acquisition of prosodic and articulatory features in adult language learning. *Canadian Modern Language Review* 34: 163-174
- O'Connor, J.D., G.F. Arnold. (1973) *Intonation of colloquial English: a practical handbook (2nd edition)*. London: Longman
- Oyama, S. (1976) A sensitive period for the acquisition of a nonnative phonological system. *Journal of Psycholinguistic Research* 5 : 261-285
- Patkowski, M.S. (1990) Age and accent in a second language: A reply to James Emil Flege. *Applied Linguistics* 11: 73-89
- Wells, J.C. (2006) *English intonation* Cambridge: Cambridge University Press.
- Yabuuchi, S., H. Satoi. (2001) Prosodic characteristics of Japanese EFL learners' oral reading comparison between good and poor readers. *Language Education & Technology* 38: 99-112